

海外留学の先に見えるモノ

村田 勝敬

■ プロローグ

大学卒業後に研究者の道を歩む場合、学位取得と海外留学は必要最低条件と考えられていた。30年前の私は独力で論文を書き上げられるようになることを最優先課題と決めており、そのような条件に興味も関心もなかった。これは、学生時代におこなった調査データを「何とか英語論文にしたい」という強い意思が働いていたせいだ。未だ自身の課題が克服できていない1989年秋頃になって、想定外に学内の長期海外出張予定者と決まり、海外のどこかに行かねばならなくなった。取消されることを期待して教授室に行くと、留学先はボスのロンドン大学留学時代の親友（ニューヨーク・マウントサイナイ医科大学教授）が主宰されている社会医学教室と決めておられた。それから出発までは泥縄式の日々であり、駅前留学を皮切りに、ビザ申請、飛行機切符の購入などで心拍数は常時80～100/分の間にあった。

■ ニューヨークへの一人旅

初めてのニューヨーク JFK 国際空港で入国審査を終えると、「Murata と書いた名札を掲げたイエローキャブ (=タクシー) の運転手を見つけなさい」と事前にニューヨークのボスから言われていた。1時間近く探し廻ったが見つけれず、また電話の掛け方は解らず、次第にパニック状態に陥った。「最悪の場合、この住所に行くべし」と紙片を渡されていたのを思い出し、意を決してイエローキャブに乗り、運転手に紙片を見せた。途中、イースト川に架かる59丁目橋を通過する際にマンハッタン島の摩天楼が見えたが、失語状態で全く会話にならなかった。為替相場は当時1ドル=150円位であり、チップ料金は5～10%と聞いていたが、タクシー料金メーター約70ドルに対し30ドル近くも余分に支払ってしまった。

新しい職場の同僚となる Gerr 博士のアパート玄関でインターフォンを押したものの、初対面なので本人かどうか確認する術はなく、まともな挨拶も交わせなかった。それでも、その日のうちに私の住む97丁目パーク街角にある大学職員用アパートに荷物を

運び入れ、2人で台所用品、電球、寝具などの生活必需品を購入するため再び出かけた。夜は近くの寿司屋に誘われたが、20ドルと高価な割には並以下の寿司ネタに思えた。15階建アパートの6階北向き2LDKのリビングルームはハーレムにある高層ビルから双眼鏡を使えば丸見えであり、「ゴルゴ13」紛いにピストルの弾がカーテンのない窓から打ち込まれるのでは…との不安が募った。そんな夜であったが、心身ともに疲労困憊し爆睡した。

■ 恐怖のニューヨーク

当時のニューヨークと言えば、危険極まりない都市と考えられていた。実際、滞在中に地下鉄内でピストル殺人が発生し、3名が死亡したとテレビで報じられていた。また、東京丸ノ内線の中では見ることもなかったが、物乞いする人、一人パフォーマンスする人、殴り合いの喧嘩をする人、ジープで擦った青リンゴを囓り始める白人女性などをニューヨーク地下鉄の中で目撃した。こんな地下鉄を利用しては59丁目2番街と3番街の間にあるスーパーマーケット「片桐」まで日本食材の買い出しに通った。



恐怖心を抱いた理由は簡単である。渡米早々に、同じ教室の病理学者 Suzuki 教授から、人通りの少ない早朝の大学建物入口で10歳前後の子どもに“Give me money!”とピストルを突きつけられる経験談を耳にしたからである。冗談と思い、子どもに「危ないから銃を下ろしなさい」と言うのと、いきなり大腿部に一発撃って逃げ出したそうだ。この話を聞いて以

後、5～10ドル札を常に数枚ポケットに入れておき、襲われたらお金を投げ出して一目散に逃げることばかり考えて行動した。また夜のニューヨークを一人歩きすることもなかった。この用心のためか、強盗に襲われることはなかった。

■ 愛しのニューヨーク？

10月初めに家族がニューヨークに来た。家人が現地の学校を調べ、2人の娘はイーストハーレムのアフリカ系アメリカ人が90%以上を占める公立小学校と大学附属保育園に各々通うこととなった。娘達は日本で英語を学ぶことなく米国に来たので、受難の日々を送ったであろう。上の子は10日目頃より小学校から「泣いてばかりで教えられないから引き取ってくれ」と電話が度々掛かってきた。同じ敷地内に全く別組織のLab Schoolというマンハッタンに住む子どもが選抜テストを経て入学する学校があり、両校長の話合いの末にLab Schoolの幼稚園部に通えることになった。1991年4月末に帰国することが既に決まっていたので特別に許可されたのだった。さらに幸運なことに、片言の日本語を話せる先生もいた。娘達は、その後短い期間であったが、楽しそうに通っているように思えた。少なくとも帰国前、二人揃って「日本に帰りたくない」と口走った。

■ 英語のセンス？



大学職員用アパートの守衛さん

東京を出発する前、日本で集めたデータを基に9編の英文論文を書くよう指示された。私の滞在期間は10ヶ月であったが、湾岸戦争の始まった年の3月末までに何とか書き終えた。ここでの最大の収穫は、2つの専門雑誌編集長であった主任教授の下で論文の書き方を学べた点である。考察では段落毎に一つの結論を添えるが、結論の強弱は得られた根拠の強さで変わり、その強弱をどう表現すべきかが問題となる。“考察”の段落最後に、例えば“Further study is needed to clarify ~”と記されているならば直前の結論をtone downした表現となる。また、ヒト集団を扱った論文では因果関係を立証することは難しく、確率的な結論しか述べることができない。例として、ヒトで煙草が肺癌の直接原因であることは証明し得ない。何故なら、煙草の煙成分をヒトに投与して、肺組織に癌細胞を見つける実験などできないからである。このため、喫煙本数の増加に伴い肺癌リスクが高くなることを明らかにしても、それを「煙草が肺癌を起こした」と置き換えることは難しいのである。同様に、ヒト研究の結論において“Our finding suggested that ~”と書いても、“Our finding indicated that ~”と言うには証拠が弱い。

ニューヨークに行くまで、“恐らく”という英単語のpossibly, probably, likelyはどれも似たような意味を持つと思っていた。前述のSuzuki教授は、米国の職業病裁判において、証拠の強さによって使う単語が異なってくると話された。100%信頼できる場合には勿論absolutelyであるが、95%前後の信頼度と考えられる場合にはlikely, 60~90%ではprobably, 50%前後ではpossiblyと区別するのだそうだ。類似語を同義語と勘違いしていたことを大いに恥じた。

■ エピローグ

帰国後の7月に東京で開催された国際会議に出席したニューヨークのボスに対し、東京のボスが“I sent Murata to you”と話された。その瞬間「ハッ、私はモノだったのかもしれない」と考え込んでしまった。別の折、「学位と留学の機会を与えたのだから、5年間は働いて貰う」とのお言葉を賜り、これを真摯に受け止めて1997年まで仕事を続けた。その間に学生時代のデータを論文にすることもできた。秋田に移り住むことになったのはボスからの2つの贈物があったからに違いない。